

論文内容の要旨

報告番号		氏名	長谷川 英雄
Vascularized Pedicled Bone Graft From the Distal Radius Supplied by the Anterior Interosseous Artery for Treatment of Ulnar Shaft Nonunion: An Anatomical Study of Cadavers and a Case Report (和訳) 尺骨偽関節に対する前骨間動脈を血管茎とした橈骨遠位からの有茎血管柄付き骨移植術:解剖学的研究と症例報告			

論文内容の要旨

【背景】血管柄付き橈骨移植術は、難治性尺骨偽関節治療において有用な術式と考えられるが、その解剖学的詳細は明らかにされていない。

【目的】本研究の目的は、前骨間動脈を血管柄とする有茎血管柄付き橈骨移植の解剖学的基礎を確立し、その臨床応用を報告することである。

【方法】14 肢の新鮮凍結屍体を使用した(男性 10 肢、女性 4 肢。平均年齢 75 歳)。前骨間動脈分枝(2-3 intercompartmental supraretinacular artery と 4th extensor compartment artery)の分岐部位、前骨間動脈と後骨間神経の運動枝の間の解剖学的関係を調べた。前骨間動脈に栄養される有茎血管柄付き橈骨移植を用いて、48 歳女性の難治性尺骨偽関節を治療した。

【結果】2-3 intercompartmental supraretinacular artery が後骨間神経の終末運動枝から遠位または近位に分岐したかどうかで、2 グループに分類できた。遠位型(57%)では、尺骨頭の遠位端から平均 10.5 cm(6.5~12.5 cm)まで有茎移植骨が到達でき、近位型(43%)では 17.5 cm(9.5~21.5 cm)まで到達することができた。臨床応用では、手術後 4 か月で骨癒合が得られ、良好な臨床成績を得ることができた。術後 2 年間の経過観察では、術後合併症を認めなかった。

【結論】前骨間動脈に栄養される有茎血管柄付き橈骨移植術は、尺骨遠位 3 分の 1 に存在する尺骨偽関節治療のための信頼できる術式となり得る。